鹿追町　ワーケーション

Hokkaido
Work×Vacation
― 北海道型ワーケーション ―
つながる。感じる。生まれる。

ワーケーションを活用した企業との出会い・連携の促進

～将来の課題解決に向けた鹿追町の種まき事業～

本日お話すること

1.鹿追町が進める課題解決型ワーケーション「シカソン」とは？
2.鹿追町の概要＆特色
3.ワーケーション実証事業開始の経緯【R3年度】
4.ワーケーションを開始して見えてきた課題【R3-R4年度】
5.R5年度の取組内容
6.ワーケーションを開始して得られた成果

自己紹介

迫田　明巳（はくた　ひろみ）

- 鹿追町企画課企画係長
- 北海道士別市＆池田町出身
- 趣味：マラソン、スキー、サイクリングなど
- 2006年 鹿追町役場入庁

【主な略歴】

2008.4：北海道企画振興部地域づくり支援局移住交流G（1年間）
2012.4：(一財)自治体国際化協会東京本部
2013.4：(一財)自治体国際化協会シドニー事務所
2015.4：教育委員会社会教育課社会教育係長
2019.7：企画課企画係長

1．鹿追町が進める課題解決型ワーケーション「シカソン」とは？

ZERO CARBON HOKKAIDO SHIKAOI

環境を学ぶ 未来を考える
鹿追町
鹿追型ワーケーション

Tokachi Shikaoi Geopark

- ゼロカーボンシティ宣言のまち（2021年3月）
  環境省 第1回脱炭素先行地域（2022年4月）
- 日本ジオパーク のまち
  とかち鹿追ジオパーク（2013年）
- 国立公園のまち
- SDGs推進のまち
- 過疎のまち

「鹿追（シカオイ）町」で、訪れた方と環境をテーマに、一緒にマラソンを走るかのように学び、考え、持続可能な未来（ゴール）を目指すショートステイプログラムです。

人口 5,266人（15歳未満 13.6%）
基幹産業：農業、観光
教育、国際交流も特徴的!!

1．鹿追町が進める課題解決型ワーケーション「シカソン」とは？

実施形態（イメージ）

出典：観光庁「『新たな旅のスタイル』ワーケーション＆ブレジャー（企業向けパンフレット）」より引用

ゼロカーボンシティ宣言のまち

ZERO CARBON HOKKAIDO SHIKAOI

- 2021年3月 ゼロカーボンシティ宣言
- 2022年4月 環境省脱炭素先行地域

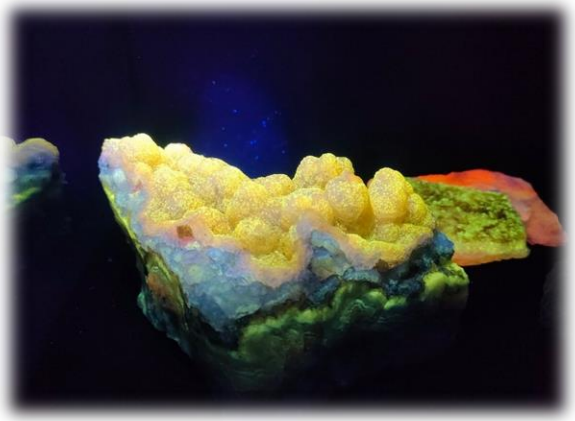
【関係事業】

- 2007年　中鹿追バイオガスプラント
- 2014年　チョウザメ飼育・マンゴー栽培
- 2017年　瓜幕バイオガスプラント
- 2021年　しかおい自営線ネットワーク
- 2022年　しかおい水素ファーム

日本ジオパークのまち

- 2013年12月　鹿追町全域が国内33地域目のジオパークとして認定
- 然別湖付近の風穴地帯には永久凍土が分布
- 元南極観測隊員のジオパーク専門員が環境教育や保全活動に関わる
- 国内で唯一『凍れ』がテーマ

凍れが作りだした地形や生態系、寒冷地に暮らす生活の知恵や産業、イベントなどを四季を通じて楽しむことができ、大地の恵みを美味しく体験することができるジオパーク



National Parks of Japan

国立公園のまち

- 北海道最高峰の旭岳（2,291m）を主峰
- 北海道を代表する石狩川と十勝川の源流地域を含む「北海道の屋根」といわれる一帯
- 天空の湖と呼ばれる「然別湖」
- 北海道で一番標高の高い湖（標高800m）
- オショロコマの亜種「ミヤベイワナ」の生息地　（北海道指定文化財・天然記念物）

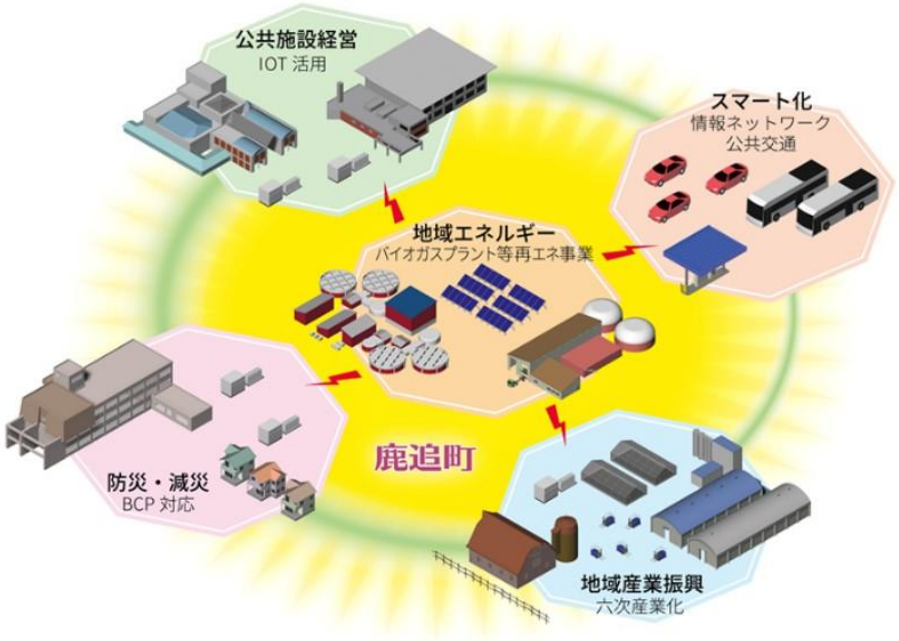
3．ワーケーション実証事業開始の経緯【R3年度】

観光庁 「新たな旅のスタイル」促進事業申請・採択【4,000千円】

鹿島建設（株）との連携

- 家畜ふん尿由来水素を活用した水素サプライチェーン実証事業
（平成27年度 地域連携・低炭素水素技術実証事業）

- 令和2年10月　地域スマートソサエティ構想調印（公民連携）
①地域エネルギー供給事業
②公共施設経営
③防災、減災はBCP対策
④ICTを利用したスマート化
⑤地域産業振興



応募の経緯

- 令和元年度～　北海道型ワーケーション導入検討・実証事業（令和2年度～　普及・展開事業）
- 令和2年12月 **「鹿追町が持続可能なまちへと進む提案」**について意見交換
　コロナ禍における国内情勢、鹿追町の強み、鹿追町の課題を踏まえた鹿追町の「地域課題解決」への一歩を提案
- 企業と連携した環境整備・受入の推進
→目指す姿の一部：国立公園内ワーケーションの推進、市街地コワーキングスペースの推進

応募の目的

①コロナ禍で激減した観光客の回復・誘導、長期滞在を行うワーケーション需要の取り込み
②環境分野における関係人口・交流人口の拡大、企業との連携による地域課題の解決

コロナ禍における国内情勢雑感

テレワーク	• テレワーク、ワーケーション企業の増加（固定費、人材の獲得） • 国の支援（Ｒ３年度　内閣府　３/４補助新設　150億円） • シェアオフィス、コワーキングスペース • 新たな企業誘致の形（釧路→十勝の動きも加速）
地方回帰 地方創生	• 東京の社会減（実際には隣接県への流出多い） • 地方創生への手厚い支援制度 • 企業版ふるさと納税の拡大（寄付額の９割を税額控除）
オンライン	• デジタル庁の創設 • ICT化ではなく、RPA化の時代 • Youtube、LINE等に代表される通信、情報メディアの変化
SDGs、環境 持続可能な社会	• いまやSDGsに取り組まなければ企業が生き残れない時代 • ESG投資の増加
働き方改革	• 多様な働き方の出現（テレワーク、企業の副業許可など）

取り組む方向性

鹿追町の課題の解決

鹿追の強み

① バイオガスプラントを核とした環境にやさしい持続可能な地域
② 山村留学、産業研修生制度など確立した他地域には無い人口流入
③ 既にある企業・地域との関係（鹿島建設、台東区など）

国内の動き

① SDGsの推進
② 地方回帰、地方移住、地方創生どこでも働ける時代
③ 企業版ふるさと納税
④ テレワークの推進

取り組む方向性の具体化

鹿追の強み

- バイオガス、水素、循環型農業などSDGs等に直結する取り組み
- 山村留学、産業研修生など外部の受入体制の確立

鹿追の思い

- 財政的な負担を抑えたい
- 高校やへき地の学校・地域の存続をしていきたい（人口減の抑制）
- 労働力を確保していきたい

企業の思い

- SDGsを推進できそうな基盤（地域）と手を組みたい
- 企業版ふるさと納税など有利な制度を活用したい
- テレワークの推進、多様な働き方（場所、副業）を進めたい

コロナ禍の国内のうごき

- 国は地方移住、テレワークを支援
- 人々も地方に回帰する動き

企業と連携した環境整備・受入の推進

- 国庫補助金（内閣府150億円）の活用
- 企業版ふるさと納税の活用（地方再生計画事前相談開始済）
- 瓜幕山村留学センターの改修など必要性の高い事業を実施しつつ、時代や企業ニーズにマッチした整備（テレワーク、半農・半テレ）
- 鹿島建設など連携企業の職員・家族受入、兼業許可で自治体支援
- 瓜幕地域だけではない受入体制の整備
- 結果的に連携企業以外の希望者の受入体制も整備

モニターツアーの様子（2022年1月）

参加企業の様子（2022年7月）

鹿追と企業結ぶワーケーション

環境や過疎…町の課題、ビジネスヒントに

【鹿追】町外の企業が町内滞在中に地域の課題に挑戦する、鹿追独自のワーケーション「シカソン」が注目を集めている。町は東京と札幌のセミナーに職員を講師役で参加させるなど、ワーケーションの新たな魅力として道内外に発信し、「仕事と観光の両立を図る従来型ではなく、地域と企業を結ぶモデルにしたい」と意気込む。（伊藤圭三）

町は、観光庁のモデル指定を受け、2021年度に大手ゼネコンの鹿島（東京）と独自のワーケーションスタイルを模索。3泊4日の日程で、然別湖のホテルに仕事場を設け、環境への影響が懸念される特定外来生物ウチダザリガニの駆除や、冬のイベント「しかりべつ湖コタン」のイグルー作りを行う旅を提案した。

本年度は、札幌のIT企業が3日間滞在し、町が進めるゼロカーボンシティ宣言やジオパーク、国連の持続可能な開発目標（SDGs）を生かしたまちづくりの様子を視察。日程の大半を町や民間企業などとの交流や学習会に費やし「環境や地域経済、過疎などの問題に触れ、ビジネスのヒントを得た」と好評だった。

町はこうした課題解決型のワーケーションを、アイデアとマラソンを掛け合わせた造語「アイデアソン」をヒントに「シカソン」と命名。「マラソンを走るように学び、考えたい」と狙いを説明する。

町の取り組みに興味を示した日本テレワーク協会は、4日に東京で開いた「デジタル田園都市」がテーマのセミナーへの出席を要請。町や長野県松本市など全国14の自治体や企業が集まる中、町企画課の担当者は、企業との関わりやワーケーションの将来性、シカソンの魅力などを紹介した。

東京、札幌のセミナーで報告

さらに、10日には道が札幌で開催する「北海道型ワーケーションセミナー」で事例報告する。

同課は「町のバイオガス発電や燃料電池車、環境問題への関心は高い。今後は、地域の課題を考えながら仕事に生かすスタイルが主流になる」と期待する。

地域貢献型ワーケーションの一環でザリガニ駆除に取り組む参加者たち＝2021年10月、鹿追町

「参加型」新モデル構築へ

鹿追町が実証実験

施設見学後、町内のホテルで地域の課題を話し合うワーケーション参加者

【鹿追】町は本年度、民間企業を軸にワーケーションの受け入れ態勢を整える実証実験に取り組む。地域参加型の新たなモデルを考案し、新規企業の獲得を目指す。第1弾として札幌のIT企業が2泊3日の日程で町内を訪れ、持続可能なまちづくりを学んだ。

実験は道観光振興機構の事業として実施。町内で旅行ガイドを行う社団法人「Ｅｎ」に委託し、町全体で取り組むゼロカーボンシティ宣言、ジオパーク、国連の持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）推進のまちづくりなどをテーマにワーケーションで訪れた企業と町、町関係者、民間事業者が視察や交流を行う。

Ｅｎは受け入れやテーマ設定、顧客開拓などを担当。観光地を巡る従来の「旅行型」ではなく、環境や地域経済、過疎といった地域が抱える問題を話し合い解決する「参加型」のビジネスモデルの構築を目指す。

初参加した札幌のＩＴ企業は社員7人が7月11～13日にＥｎが企画した家畜ふん尿由来のバイオガス発電や然別湖に生息する特定外来種ウチダザリガニの駆除を見学。町関係者との学習会では水素で走る燃料電池車（ＦＣＶ）の活用やＳＤＧｓと行政との関わりなどに関心を示した。

道内のワーケーションに詳しい北海道二十一世紀総合研究所（札幌）の佐藤公一次長は「旅行型のワーケーションはどこも同じで長続きしない。地域の課題解決に取り組む参加型が今後の主流になるのでは」と話している。（伊藤圭三）

4．ワーケーションを開始して見えてきた課題【R3-R4年度】

Ｒ３年度　観光庁 「新たな旅のスタイル」促進事業申請・採択【4,000千円】

①トライアルプログラムの企画・運営
②ワーケーションコンテンツの造成・磨き上げ
③受入れ体制検討
④情報発信

事業成果

■既存の地域資源の強みを再認識
　環境に関連する地域資源・人材が、「環境型」のワーケーションの魅力あるプログラムとして十分展開可能であることを確認することができた。

■鹿追町のビジョン・コンセプトとマッチングモデル企業との親和性を確認
　鹿追町が目指すまちづくりのコンセプトに沿ったワーケーションが、鹿島建設㈱のイメージするワーケーションと合致する部分も見られ、今後の継続が期待できる状況となった。

■ワーケーションの受入れ体制構築に向けた地域内関係者の気運醸成
　トライアルプログラムへの地域内関係者の参加等を通じて、ワーケーションの意義の共有につながり、自律的な受け入れに向けた気運の醸成につながった。

次年度以降の取組

■季節や滞在期間を考慮したプログラムの検討
　トライアルプログラムを実施した、秋・冬以外のプログラム、短期間滞在に対応するプログラムの造成を目指すとともに、ワーケーションのパッケージ化を目指す

■鹿島建設㈱との一層の関係強化とワーケーション参加企業の新規獲得
　鹿島建設㈱と、課題解決型ワーケーションの継続的実施を通じた関係強化を図るとともに、ターゲティングを定めて、新規企業の獲得に向けた検討およびプロモーション等を行う

■ワーケーション受入体制の構築に向けた検討
**　コンシェルジュ機能設置や代理店との連携など体制構築に向けた検討継続する**

4．ワーケーションを開始して見えてきた課題【R3-R4年度】

Ｒ４年度　北海道観光振興機構　地域の魅力を活かした観光地づくり推進事業【1,233千円】

①情報発信（ロゴ・パンフレット作製、各種セミナー登壇、メディア活用）

②受入体制の構築（コンシェルジュ業務委託）

③コンテンツの造成・磨き上げ（視察研修）

ワーケーションコンシェルジュ 正保縁さん

コーディネートするのは、町内でカフェ＆農泊を経営する正保さん。―「私は10年前に単身鹿追に移住してきた生粋のよそ者です。永住を考えるようになった時、よそ者だった私だからこそできる事はないかと考えてグリーンツーリズムと出会い、コロナ禍で派生したワーケーションに至りました。よそ者だからわかること、発信できることがあります。私の好きになった鹿追町で、鹿追らしい・鹿追だからできることをコーディネートします」―

【目的】

令和３年度に観光庁の事業採択を受けたが、その中で、**民間企業を中心としたワーケーション受入の自走化に向けた実証事業の継続と、問合せから受入・プログラムの実施までを行うコンシェルジュ機能の体制構築が課題**とされたことから、コンシェルジュ実証委託業務を実施

【委託業務内容】

1. ワーケーション受入に係る企業等からの相談等窓口業務
2. ワーケーションプログラムの磨き上げ
3. ワーケーションの全体調整及び予約等業務
4. 企業等及び旅行代理店等の調整業務
5. プログラム内の必要に応じた随行及びファシリテート
6. プログラム終了後のSNS等への情報発信

【業務成果・課題】 報告書より抜粋

- （今回参加の２社が、旅行会社手配、参加者手配の両方があったことを踏まえて）旅行会社を介する場合と直接コンシェルジュが対応する場合を分けて提案する必要性

  <旅行会社手配が適当な場合>

  企業研修、開発合宿

  <コンシェルジュ対応が適当な場合>

  出張、視察目的

- **コンシェルジュ機能の採算性を考えたときに、１日の対応価格が10,000円を下回らない程度が適正価格である。**

- 町からの委託料無しというのも今後検討が必要であるが、コンシェルジュ機能が安定するまでの間はあってもいいのではないか。

- **コンシェルジュの手数料では利益は得られないが、かかわった企業との新規事業の発生が起きている**

4．ワーケーションを開始して見えてきた課題【R3-R4年度】

「（仮称）ワーケーションサミットinしかおい」の開催

これまでの課題を解決する策

- 開催時期を１１月にすることで観光の**閑散期**を狙う（１１月はWAJのワーケーション月間でもある）
- 宿泊ホテルの**シングルユース問題**を解決
- あえて、相部屋にすることで交流を図るコンセプトも試してみてはどうか？

地元の飲食店の利用促進
町民への発信！

ワーケーションの普及

- 立科work tripでワーケーションを推進し、鹿追町のアドバイザーでもある立科町の上前氏、渡邉氏等招へいし、参加企業に**ワーケーションという働き方**を普及

持続可能なワーケーション

- 内容を事前に固めてしまうことで**受入側の負担を軽減**
- ５社×各４名＝20名のワーケーションを対応するより、１社×20名で１回の方が**受入負担軽減**、**関係企業増加**
- 鹿追町をフィールドに企業同士の関係性構築

相部屋プランの追求
コテージなどへの展開も

企業のワーケーション
今後の連携のスタート

旅行業のハードルをクリア

- **旅行業法**上で問題がないように着地型のイベントに！

2023シカソンサミット＆セミナーinしかおい

日　程：2023年11月20日～22日
場　所：鹿追町内
参加者：サミット12名（11社 12名 15泊）
セミナー35名（サミット参加者含む）

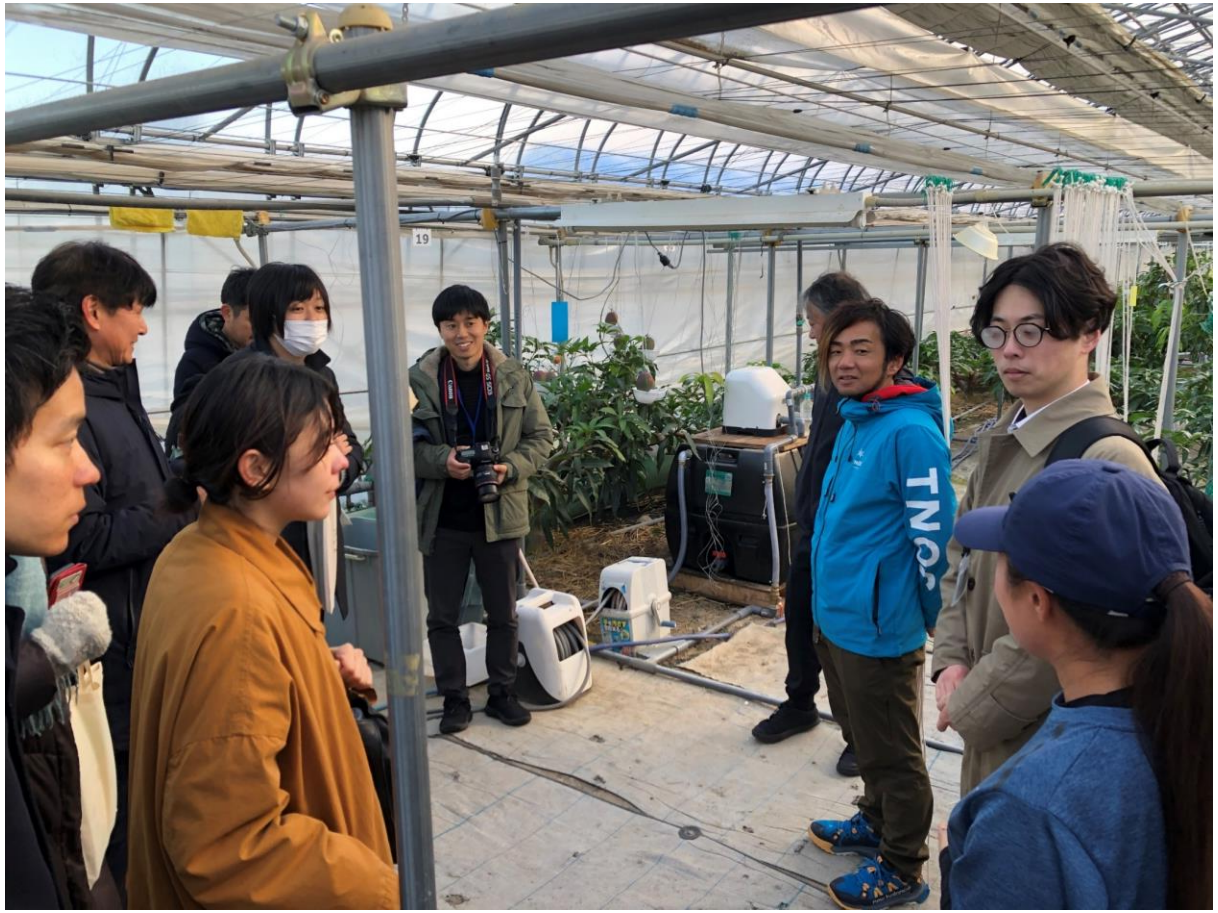
内　容

- **ゼロカーボンの取り組み視察**
- **とかち鹿追ジオパーク視察**
- **町内キーマンとのセッション**
- **シカソンセミナーinしかおい**
- **情報交換ワークショップ**

参加者の声

- 業種や専門、出自の全く違う人が一同に会することで、今まで考えもしなかったアイデアが浮かびました。
- 札幌、東京、長野と広く参加者が集まり、異業種間での交流を経て、自身も考えさせられることが非常に多かった。
- 合宿型の研修を鹿追町でやってみたい！
- ワーケーションを通して地域に根差して活動されている方や、鹿追町様の持続可能な取り組みに関しての興味が大きかった。
- このイベントを通じてより多様なアイデアを生み出すためには、もっと自社の他の社員にも参加してもらいたい。
- 記憶に残るために「体験」「人に会う」ことがとても重要なことを改めて感じることができた。

5．R5年度の取組内容



5．R5年度の取組内容

ワーケーション可能性探る

鹿追で「シカソンサミット」

【鹿追】ゼロカーボンなど町の環境面への取り組みに関心がある企業と地元が交流する「2023シカソンサミットinしかおい」が20～22日、町内で行われた。21日のセミナーでは、鹿追に滞在しながら仕事をするワーケーションの可能性や課題を話し合った。

鹿追でのワーケーションの可能性と課題などを話し合った「シカソンセミナー」

町民ホールでのセミナーには約30人が参加した。第1部は先進地・長野県立科町の担当職員らが講師となり、「自然に恵まれ、環境問題に取り組む鹿追は可能性がある」などと期待を込めた。

第2部は鹿追で2021年度から毎年ワーケーションを実施しているシステム開発道内大手のHBA（札幌）の担当者が「新型コロナで海外研修に行けなくなり、代わりに鹿追でワーケーションを始めた」と説明。「参加者からも好評で、普段エンドユーザーと接する機会のないシステムエンジニアの社員が生の声を聞けて、人材確保面でも役立っている」と話した。

（和田年正）

鹿追 ワーケーションの聖地に

先進地の関係者招きセミナー

【鹿追】まちの課題解決を組み込んだワーケーションについて考える「2023シカソンセミナーinしかおい」（鹿追町主催）が11月20～22日、町内で開かれた。参加者は課題解決型ワーケーションについて意見を交わした。（大井基寛通信員）

立科町の取り組みについて紹介する上前さん（左）と渡邉さん

「シカソン」は、ワーケーションをしながら、まちの課題と解決策を探り、企業と町民らがマラソンのように長期で取り組むことを目指す事業。鹿追とマラソンを掛け合わせた造語。

20日は、町内で進むゼロカーボンの取り組みや、とかち鹿追ジオパークを視察。21日は町民ホールでセミナーが開かれ、事業者など約40人が参加した。

セミナーは2部構成。1部の講演では、課題解決型ワーケーションの先進地、長野県立科町企画課の上前知洋係長が雇用創出型テレワークなど地元の取り組みを紹介。信州たてしな観光協会の渡邉岳志さんが、地域事業者との対話の重要性などについて述べた。

オンラインで参加した十勝シティデザイン（帯広）の柏尾哲哉さんは、首都圏と十勝をつなぐ人たちと新しい価値や事業を創造する「リゾベーション」を提唱。2部では、鹿追町内に複数回ワーケーションで訪れている札幌のIT企業、HBAの高野遠経営企画副本部長と、鹿追町企画課の迫田明巳係長が対談し、ワーケーションの参加側と受け入れ側の目線で、課題などについて意見を交わした。

来訪者との対話 重要性提起

迫田係長は「企業と一緒に5年後、10年後につながる鹿追独自の方向を目指していきたい」と話した。

6．ワーケーションを開始して得られた成果

2023シカソンサミット
inしかおい含む

	R１	R２	R３	R４	R５
	１件	0件	3件	２件	3件
	２社	0社	1社	２社	12社
	2名	0名	15名	11名	34名
	0泊	0泊	45泊	22泊	39泊

６．ワーケーションを開始して得られた成果

Ｒ３年度　ワーケーション実証業務　運営参画企業
地域活性化起業人：タウンセールス･プロモーション

R4～５年度　ワーケーション参加企業
地域活性化起業人：自治体DX推進

- そもそも鹿追町の目的として、ワーケーションから直接得られる効果（観光誘客、経済効果）を目的としていない。
- インバウンドが回復基調にある中、いわゆる観光対策にはつながらないという思いは更に強くなった。
- ただし、観光の閑散期対策であれば、受入ホテル側のニーズとも合致する（シングルユース問題の解消）
- **<u>企業との関係構築が進んでいる</u>**